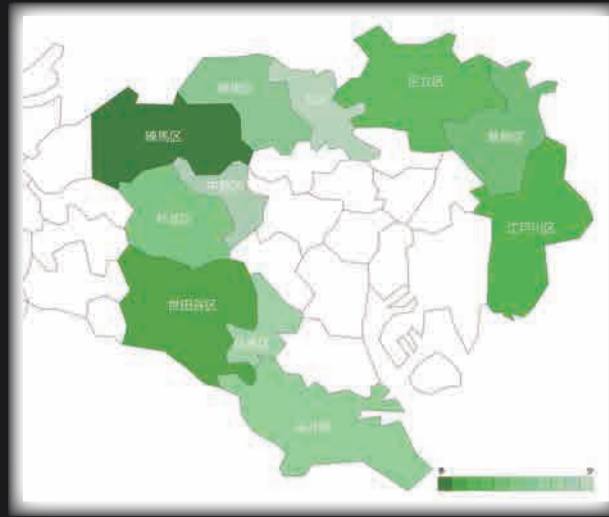


背景



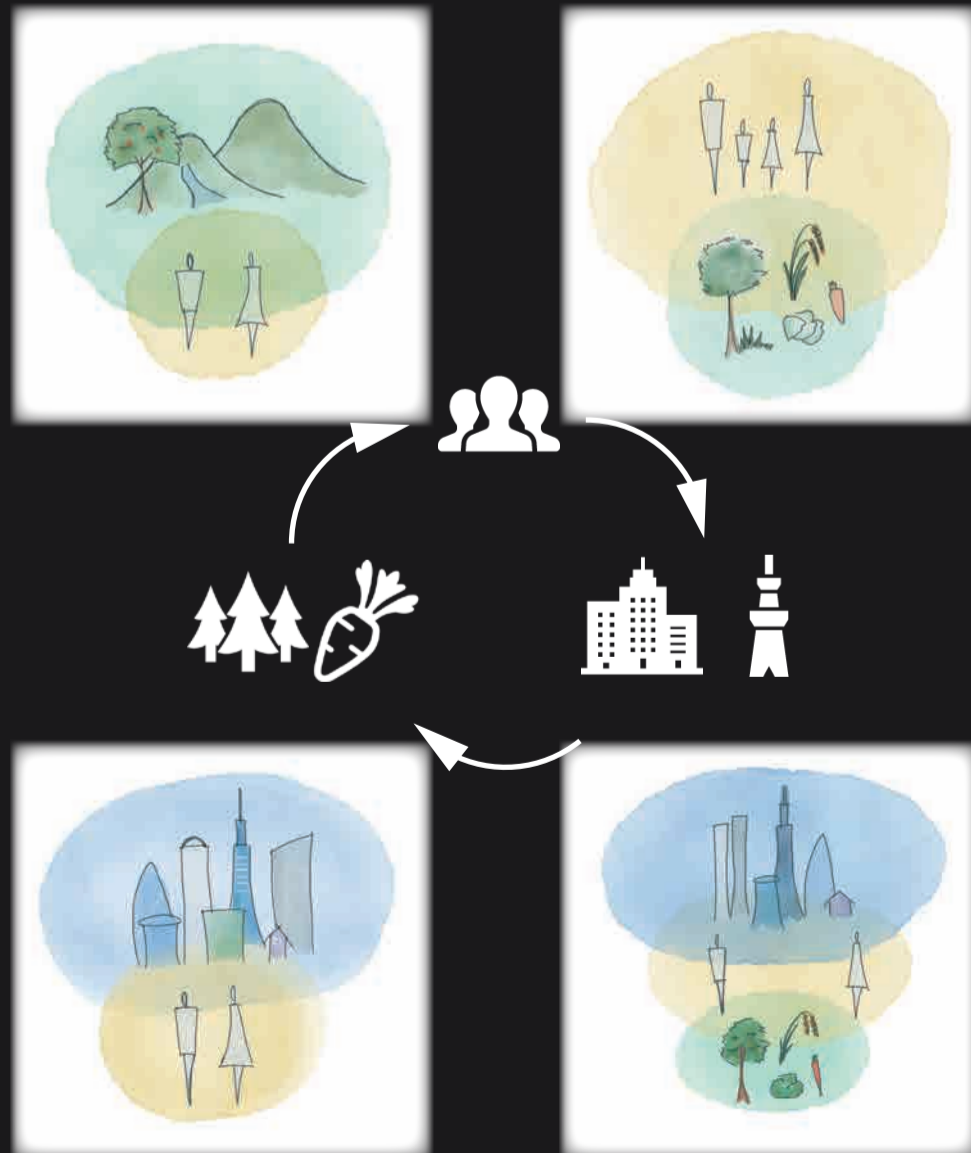
東京都練馬区の生産緑地は約177haあり、23区内では最大である。現在でも住宅街には多くの畑や公園があり、東京でも珍しい緑景観が多い区である。この景観は生産緑地に起因するものが多く、集合住宅・戸建等の宅地転用による農地の浸食が徐々にみられることが昨今の問題である。本設計ではこれらの問題を解消するため、宅地転用された場合における住戸と畑の融和性が高い空間構成が必要と考えた。

コンセプト

長い間人間と自然の関係は、弱い人間が強い自然へ寄生していたが、現在の都市では力関係が逆転し自然が人間へ寄生している。生産緑地における畑はその代表例といえる。この都市での「人間へ寄生した自然」はとても美しいと考える。それは、人間に虐げられ本来の山や森のような壮大な生命力をなくし、人間に寄生する逆境の中でもなお滲み溢れ出る生命力によるものがある。近年うたわわている共生を目的とした緑化では、寄生した緑化のような逆境ゆえの膨大な生命力は生まれない。都市の中での自然の在り方として、畑のような完全に管理され、「人間へ寄生した自然」の美しさを顕在化すると考えた。

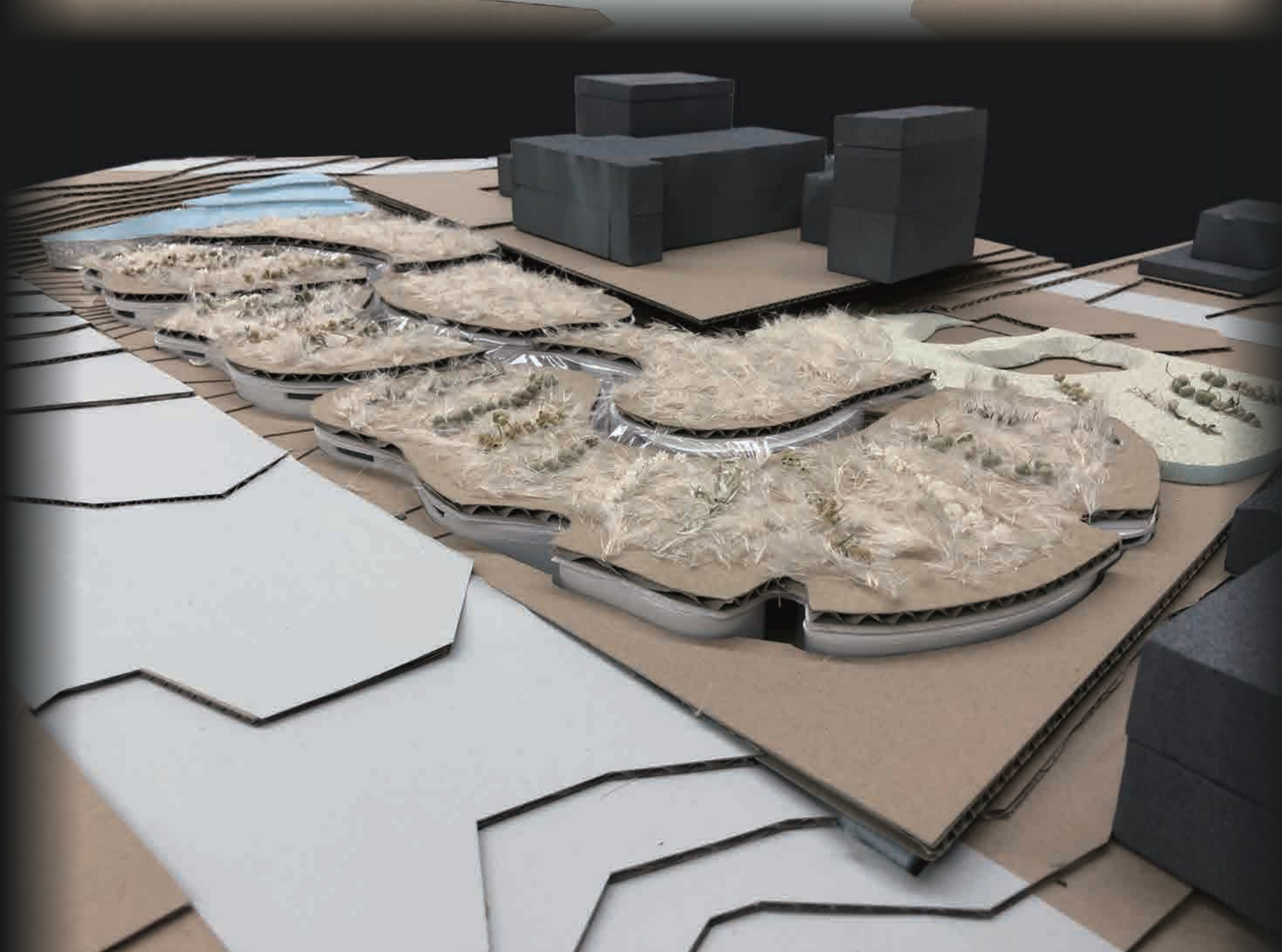
都市は人間により創られ発展し、その過程でさまざまな建築が生まれ一種の自然ようになっていった。しかし、時間経過によりそれらは我々の寿命を超え、都市から人間が生まれ、人間は自身で創造した都市の建築に寄生していった。自然は人間に寄生し、人間は都市に寄生している。つまり現代都市では三者が連続的に寄生している。この連続的な寄生関係は生命体の円環に似ている。そこで、自然と人間と建築が連続的に寄生しひとつの生命体のような建築を提案する。

そして、この生命体が細胞のように東京に分裂・増殖し、都市の中に寄生した自然が輝き広がるきっかけとする。



寄生者たちのコロニー

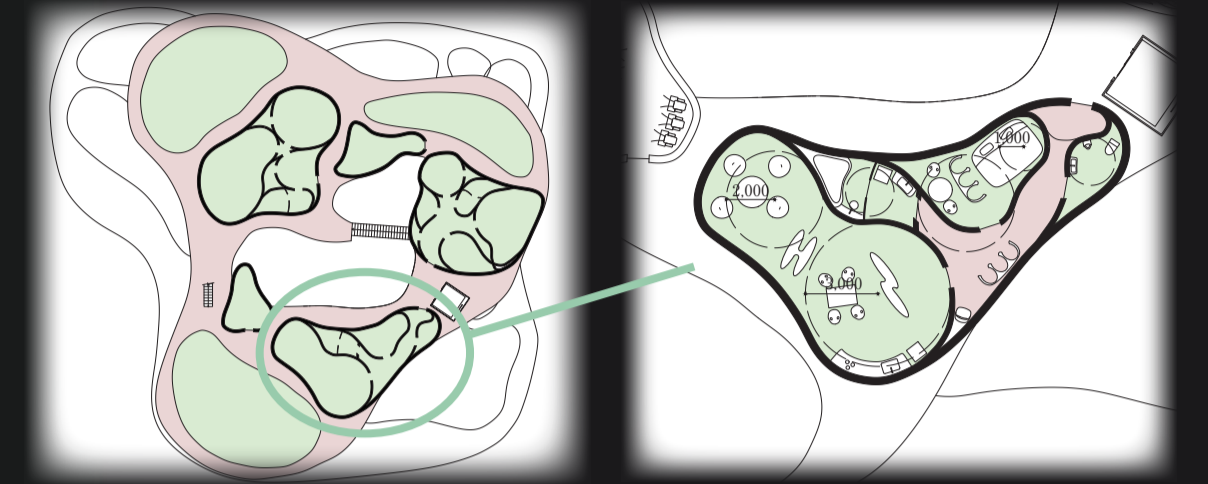
東京都練馬区生産緑地跡における集合住宅の提案



設計概要

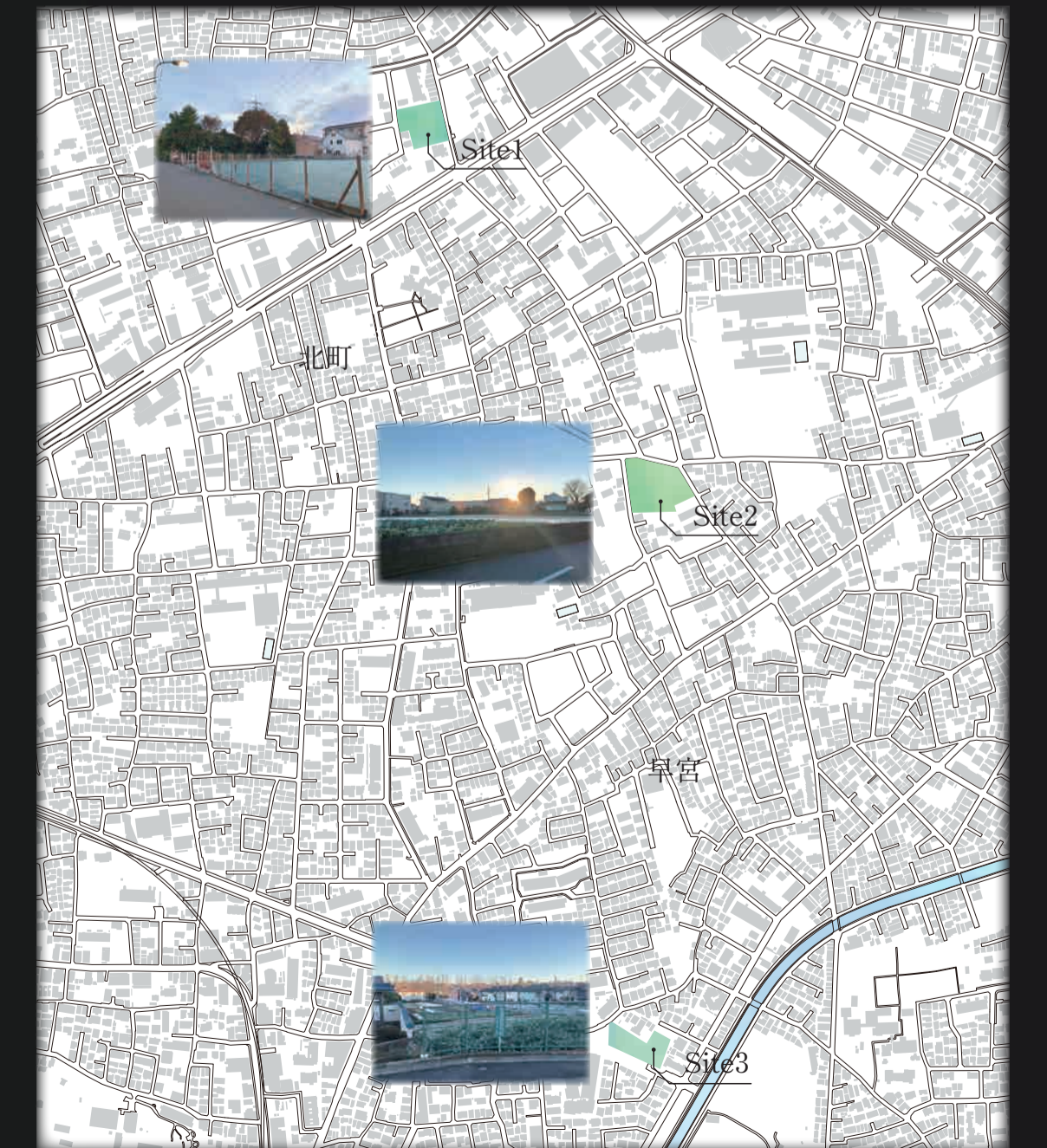
コンセプトをもとにそれぞれの敷地特性に見合う空間構成・集合住宅と畑のありかたを模索した。全体の建築の共通項として住戸の概形は最小限の法則でゆらぎのような自由曲線で表し、通路はより流動を生むために緩急のある形状とした。また、建築全体が生命体の円環をイメージし「入れ子の円環構造」となるように構成した。

住戸の中は三つの大きさの円をもとに、上記の法則を外れないよう計画した。また家具においても細胞内の組織をモチーフとし、自由曲線で計画した。敷地から家具までの連なりを意識したことでより入れ子の表現を強めた。

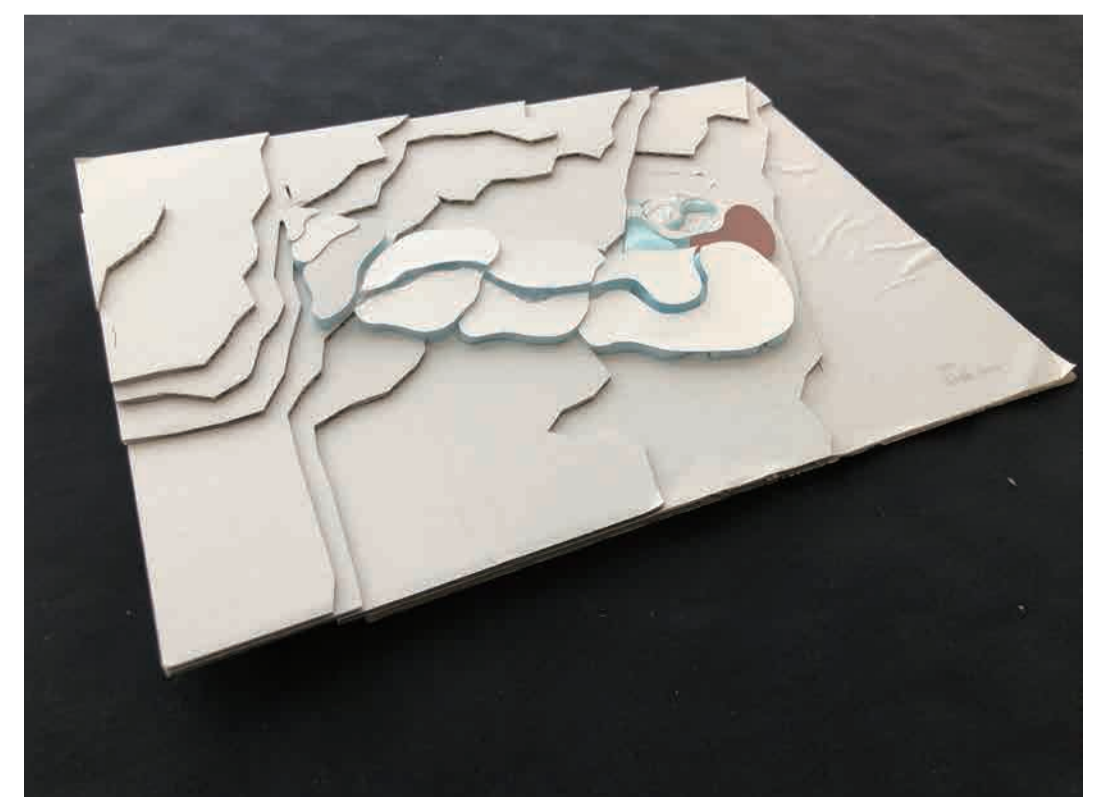
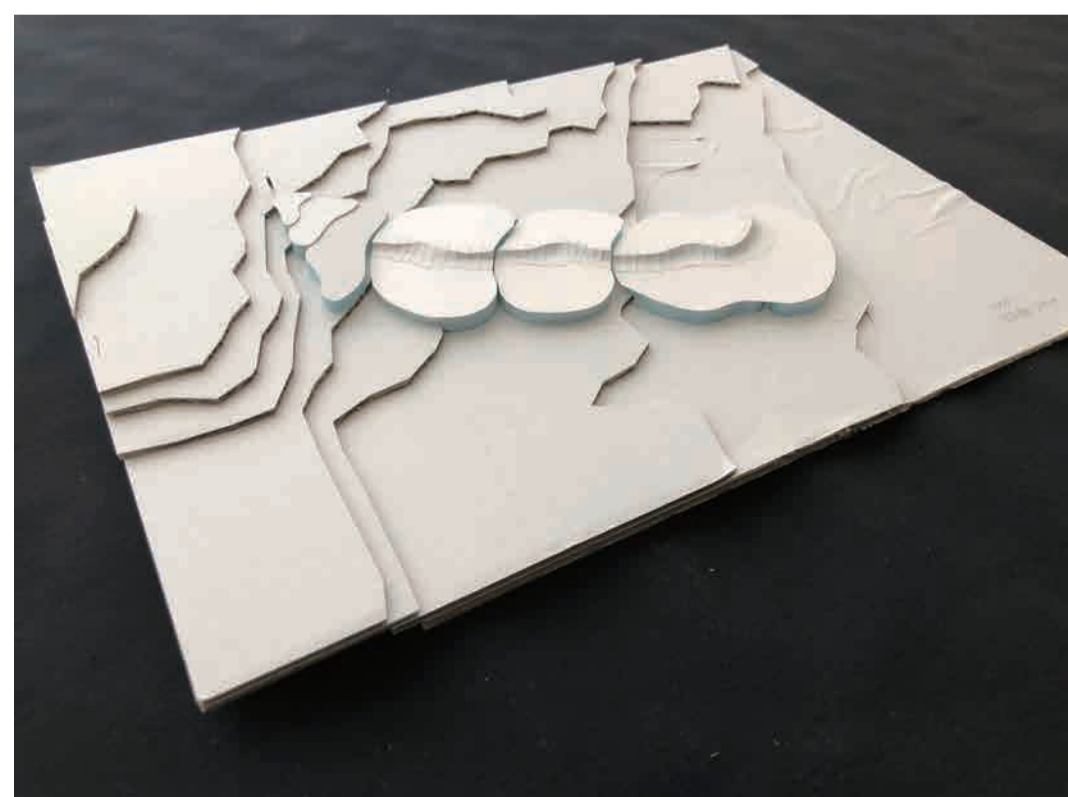
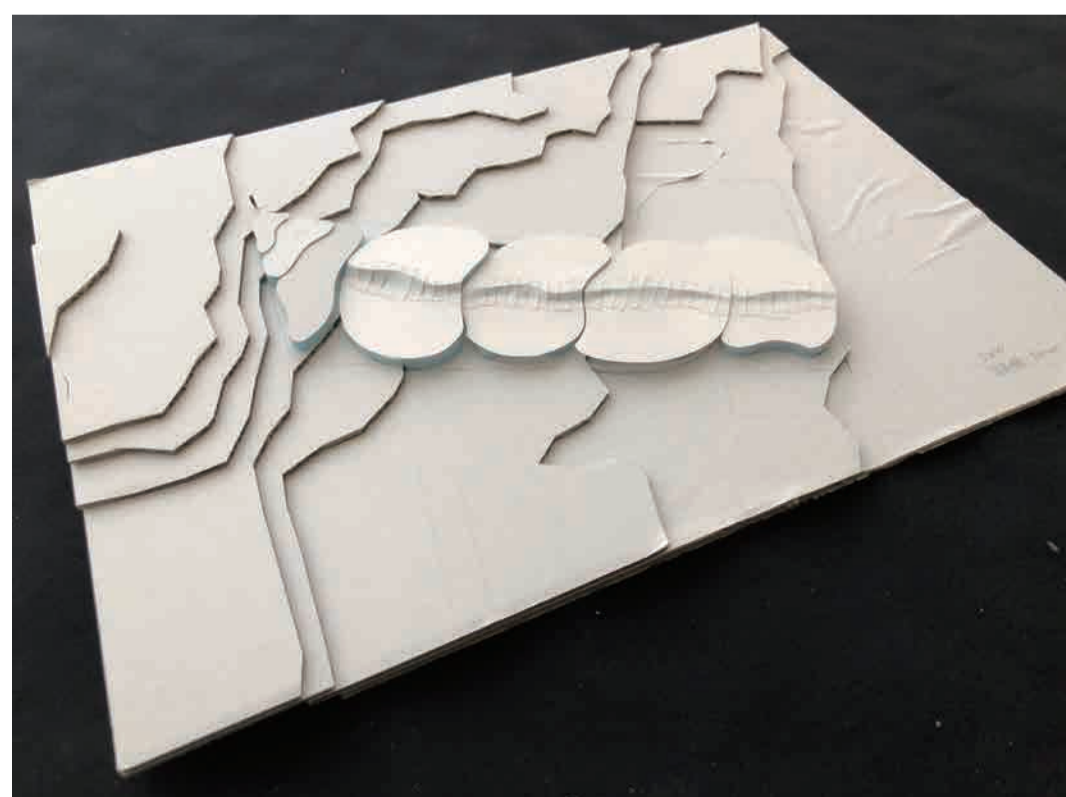
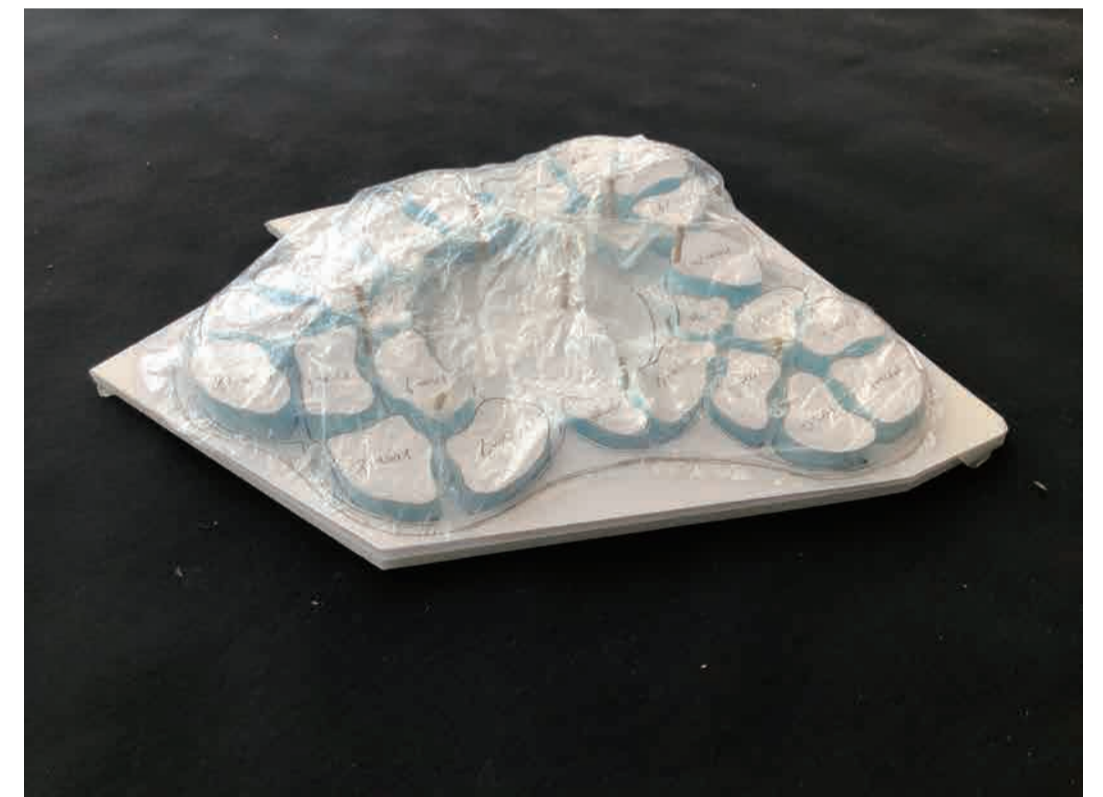
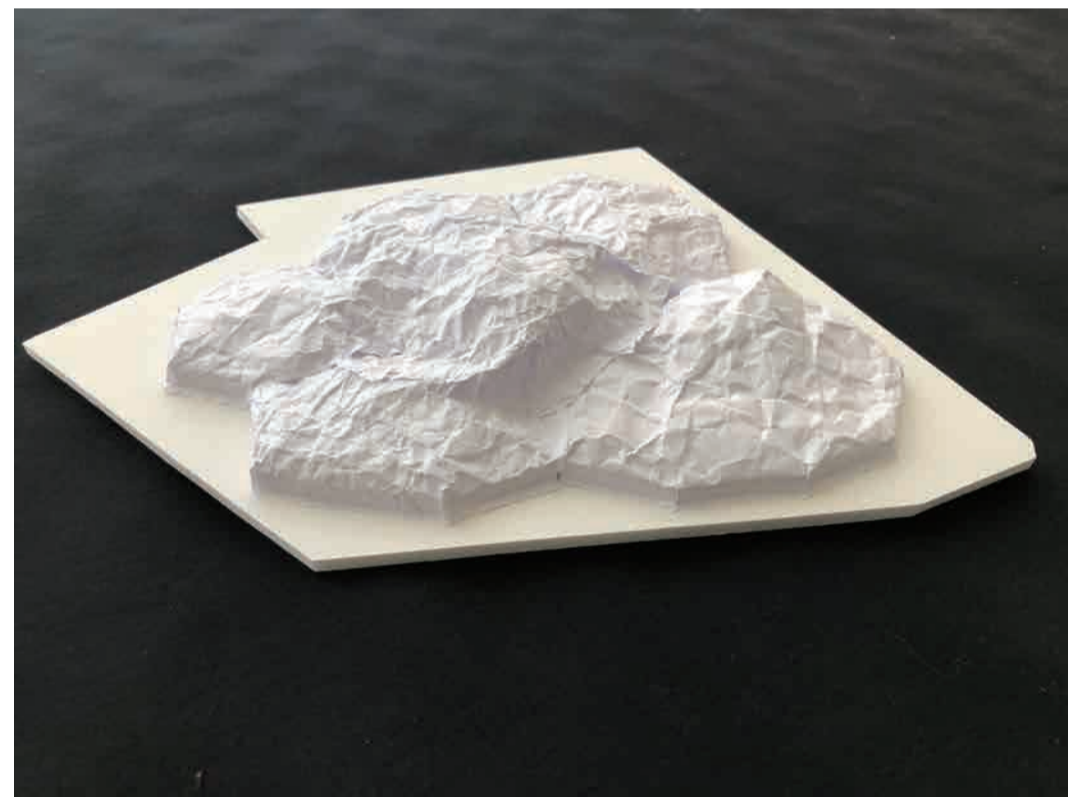
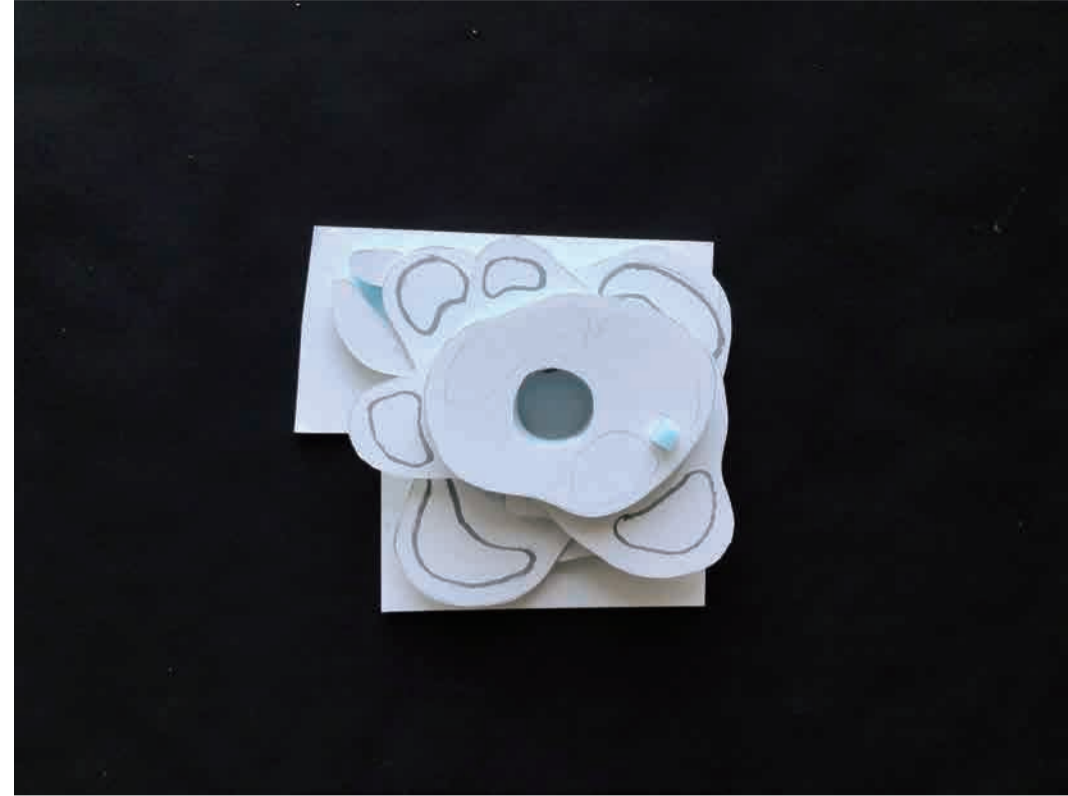
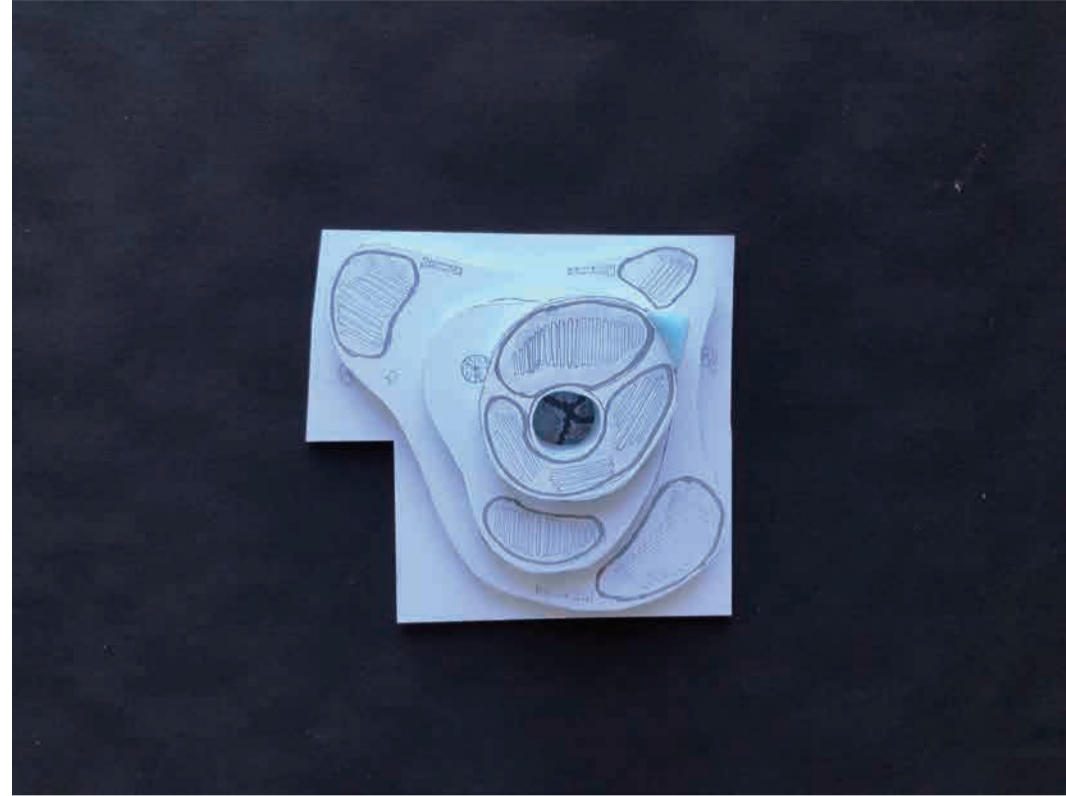


敷地概要

計画地は練馬区北町・早宮における3つの生産緑地。この3つはそれぞれ、生産緑地法が制定された1970年代初期から農地利用され面積も2000㎡以上と都市緑化としての効果も高い。また、現状で宅地転用の可能性がある生産緑地でもある。それぞれ周辺環境や敷地の特性も異なるためそれを生かした空間計画を構成する。

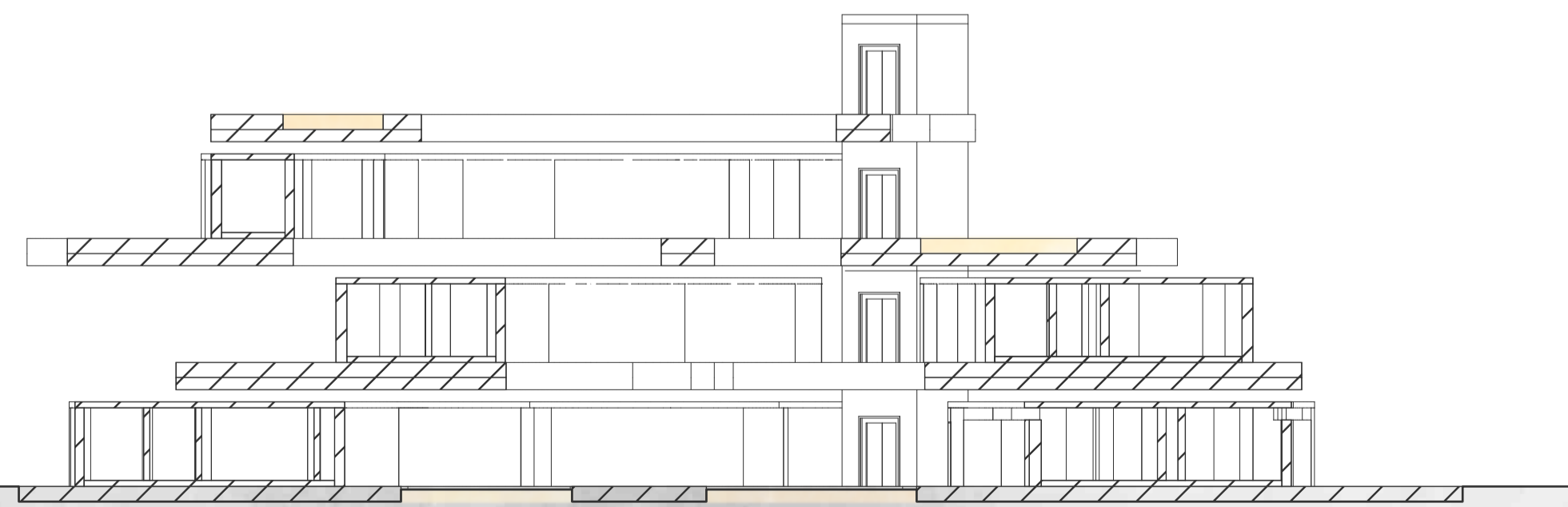


形態の進化過程



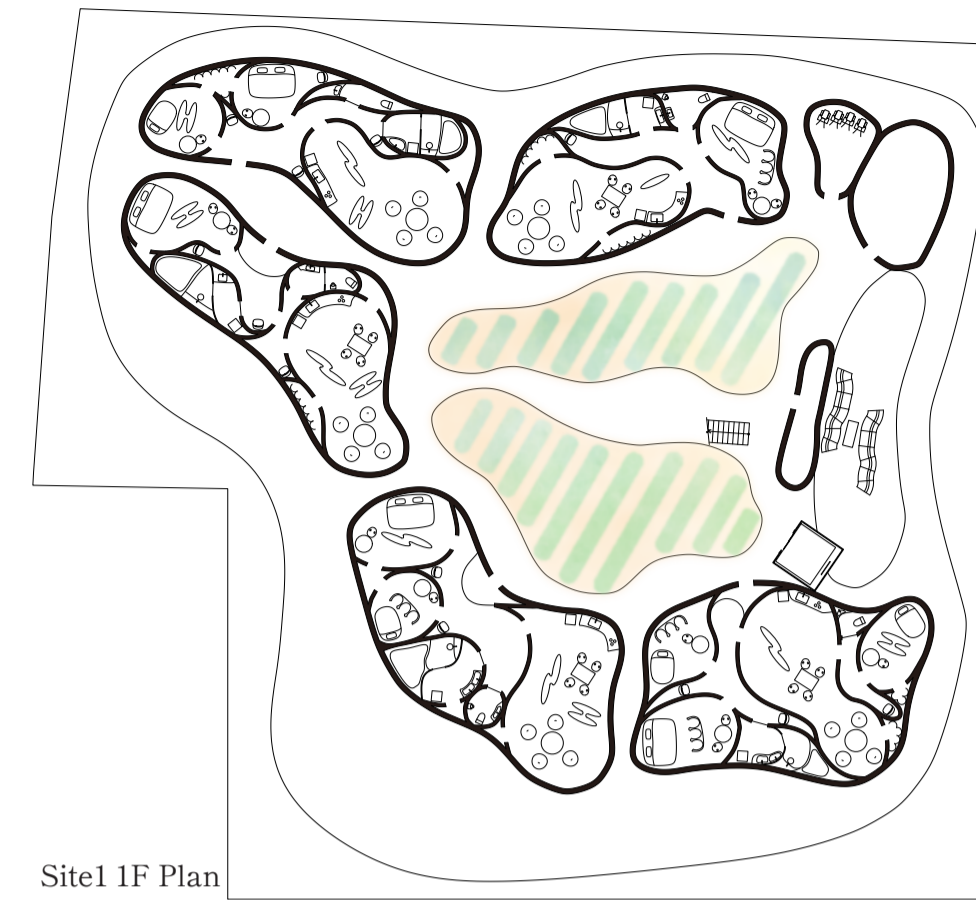


Site1 2F Plan

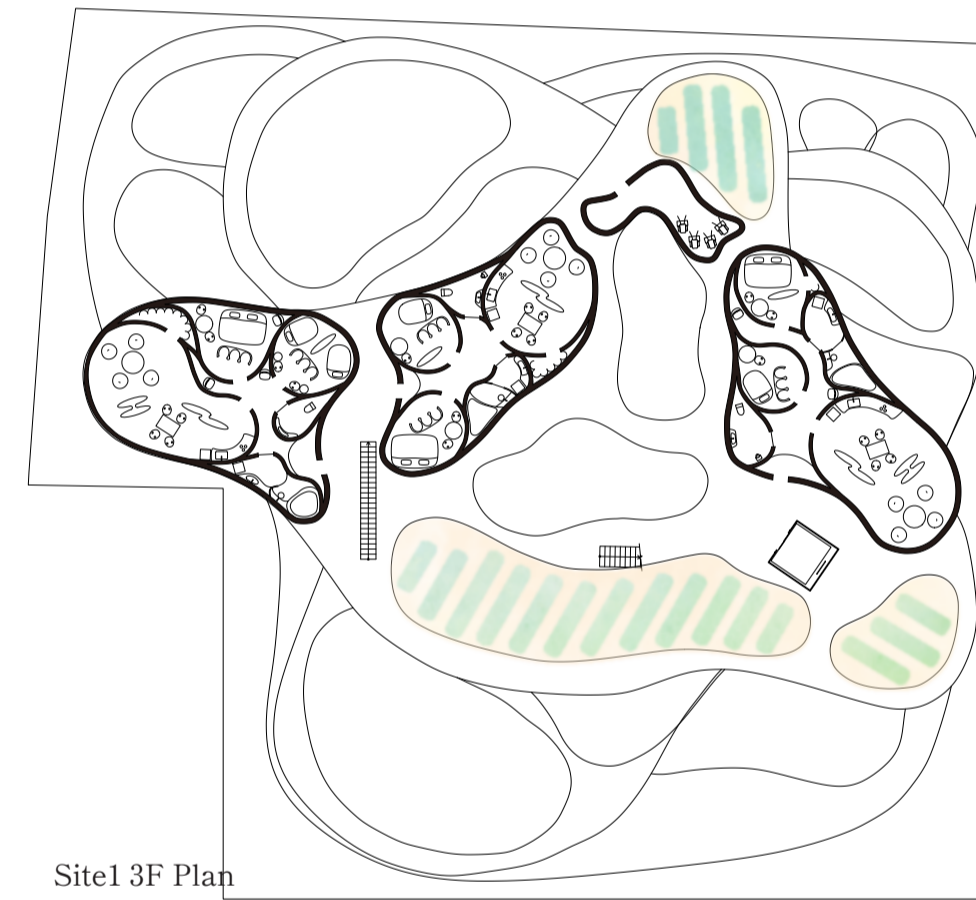


Site1 A-A Section

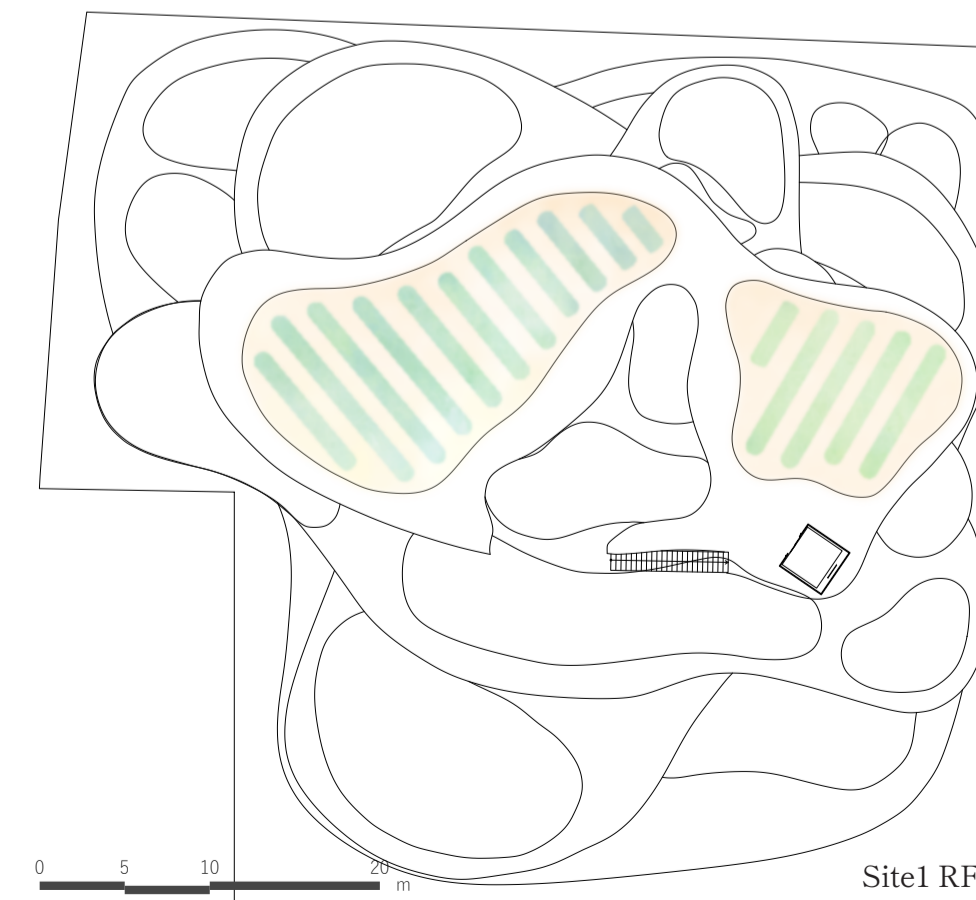
0 5 10 20 m



Site1 1F Plan



Site1 3F Plan

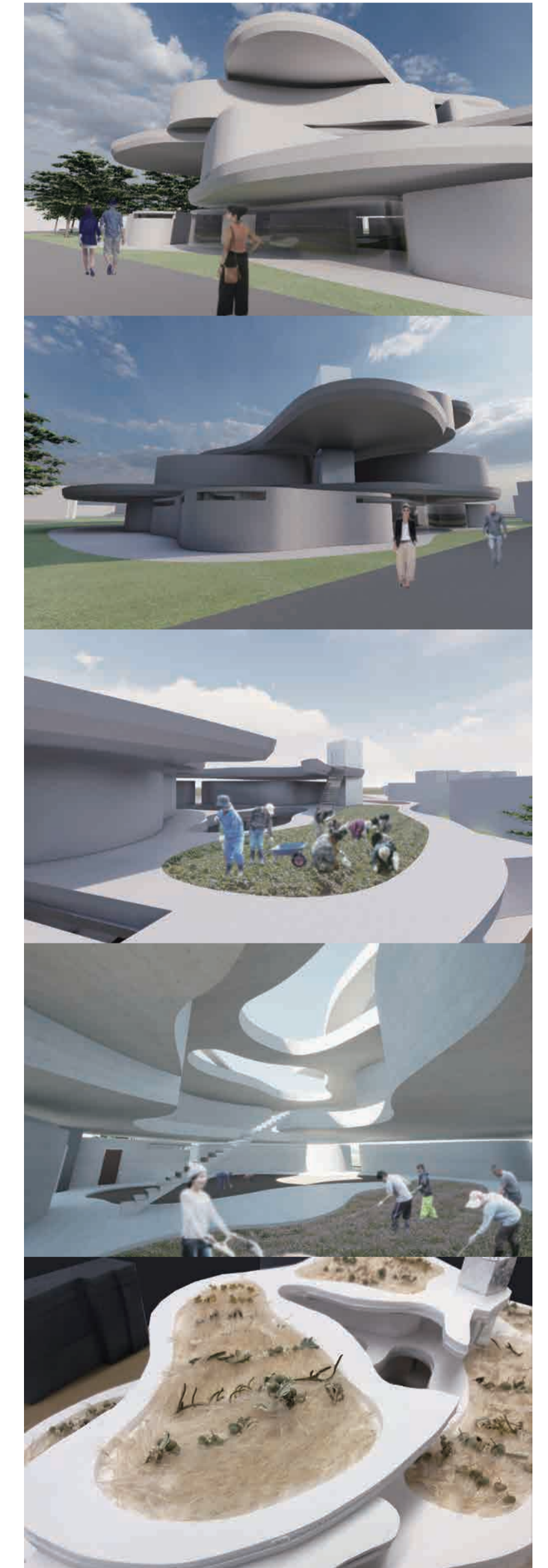


Site1 RF

0 5 10 20 m

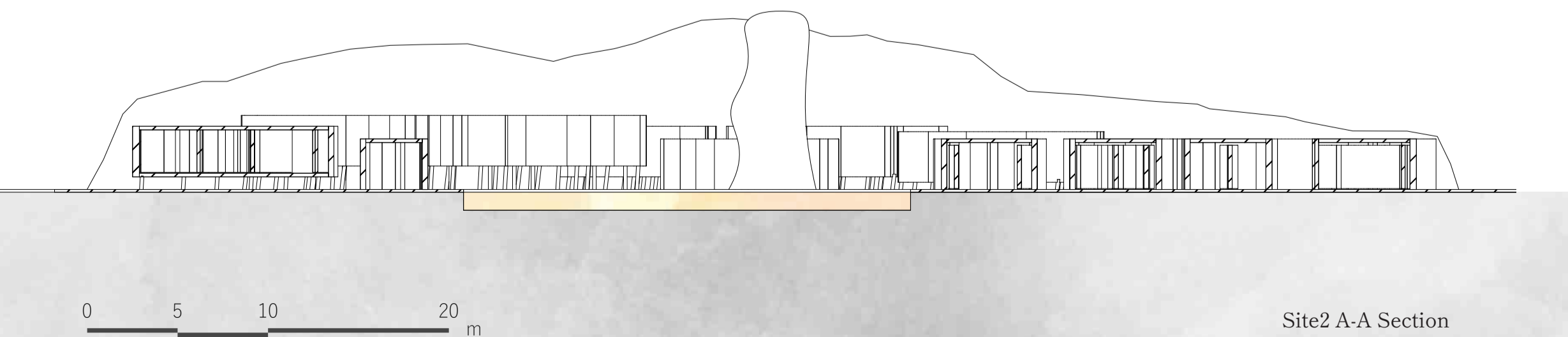
Site1

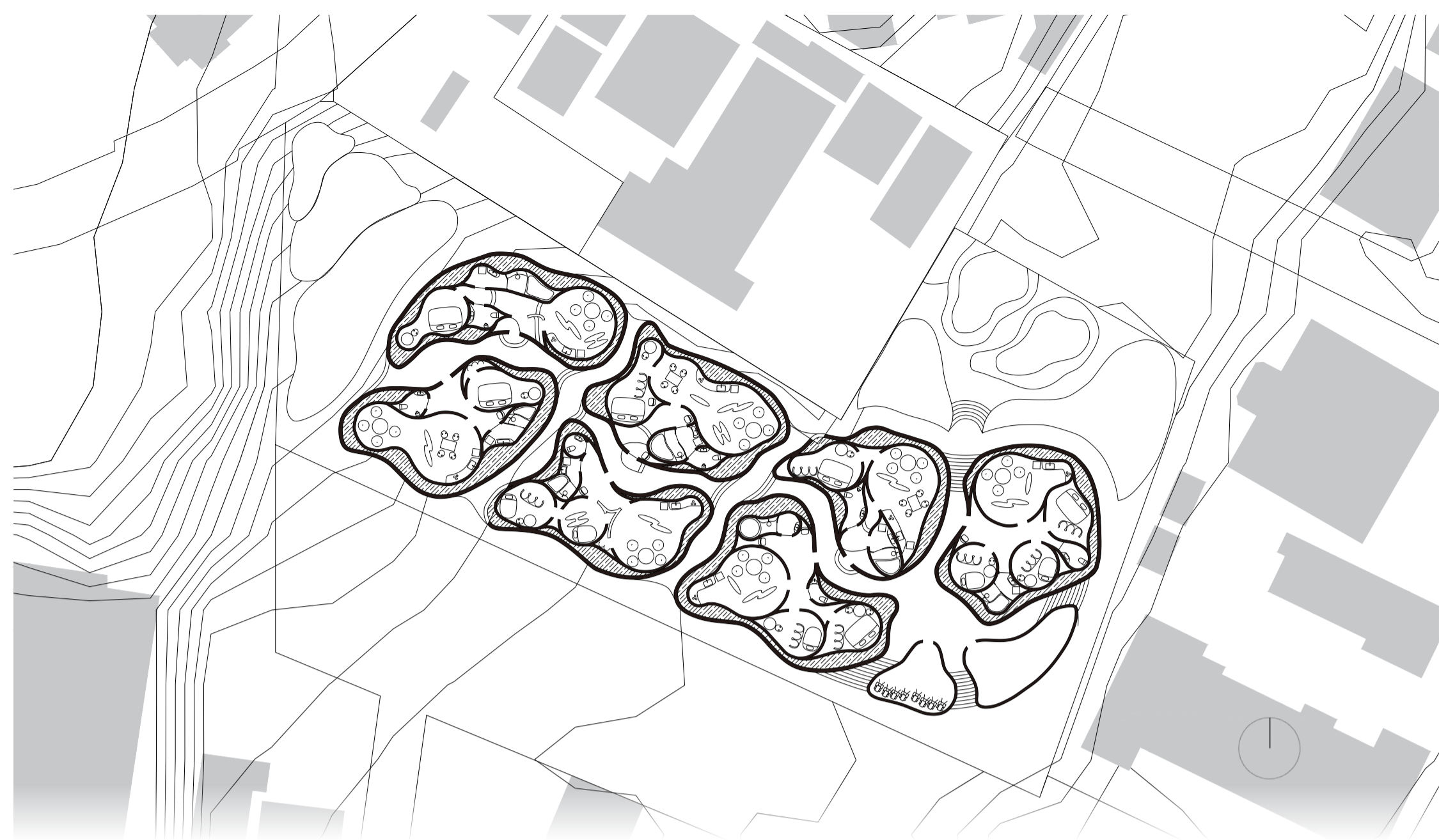
前面道路が4車線の大通りに接続し交通量が多い。周辺既存建築は中高層のため、採光が取りやすく大通りからも見えやすくなるよう複層化し空間構成を進めた。住戸と畑の境界が曖昧となるようそれぞれを配置し、間を緩急のある通路・吹き抜けて連結することで生まれた曲線の重なりを垂直方向に延長し、トポロジカルな空間構成とした。



Site2

周辺既存建築は低層のため1階層とし、建物全体を巨大なビニールハウスのように透明建材のシェルで覆う。加えてモザイクのように土壌ユニットを散りばめる。これは敷地中央の住戸に囲まれたメインの畑とは異なる緑空間となる。住戸間とシェルでレベル差を出し、生まれた高さ方向の余白空間を使いシェルの換気口の開閉や、シェル上への動線を確保する。空調設備として通気塔を配置する。

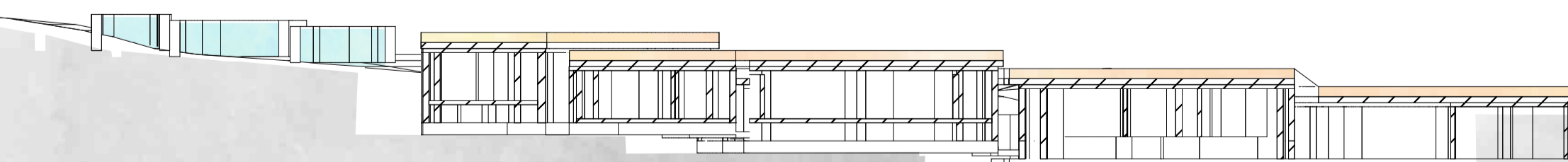




Site3 Plan



Site3 RF



Site3 EW Section

Site3

緩やかな傾斜地に位置し、周辺既存建築は低層。傾斜の景観を守るためすべての住戸の屋根を畑と庭にすることで、傾斜を保持し浮き出した。畑と庭の給水源として頂部に貯水池を設け、そこから川のように各屋根に水を流す。流水はレベル差を用いて流れていき、終着点は畑と庭と田んぼにより構成した人工の自然となる。

